



FSDi

一般社団法人未来社会デザイン機構
Future Society Design institute

【未来社会デザインコンテスト2026】

場所が変わるから...

折原知晟 / 武蔵野大学アントレプレナーシップ学部

発表日：2026年9月10日

1	タイトル&ビジョン	1分
2	きっかけ（原体験）&地域課題	2分
3	企画の全貌と体験ストーリー	3分
4	現地での気づき & ブラッシュアップ	★最重要 4分
5	持続可能な仕組み	2分
6	安全面・環境面・リスク対策	1分
7	リピート & 関係人口化の仕掛け	1分
8	地域と未来にもたらす変化	1分

発表は1組〇分です（時間配分・ページ数は自由に変更して構いません）

3年後、 場所が変わる。 そのとき、 人も育っている。

完成を待つのではなく、完成前の3年間から若い関係人口を育てる。

東尋坊版 学生共創インターン構想



学生インターンを目的にするのではなく、若い人が東尋坊に関わり続ける入口をつくる。



完成前の3年間で、人を育てる準備期間にする。

「3時間滞在してもらおう」だけでは、東尋坊は変わらない。

現地視察を通して、私は“滞在時間”の課題の奥にある、本当のテーマに気づいた。

最初に考えていたこと



若者の滞在時間を伸ばしたい

- ✓ 応募時は「3時間パスポート」を提案
- ✓ 店舗を巡り、夕日まで滞在する仕掛けを考えた
- ✓ SNS発信や地域消費につなげる想定だった

現地で気づいた“本当の課題”



場所が変わる。では、 誰がその先をつくるのか？

- ✓ 東尋坊の再整備は進んでいるが、完成は約3年後
- ✓ 今のうちから、新しい人やアイデアを育てる余地がある
- ✓ 行政だけで企画を生み続けるのは難しい
- ✓ 若い人が関係人口として関わり続ける仕組みが必要



必要なのは、新しい施設だけではない。**新しい“担い手”が入り続ける仕組み。**

3年後に場所が変わる。そのとき、人も育っている状態へ。

その手段の一つとして、東尋坊版の学生共創インターンを考える。



目的

若い関係人口・未来の担い手を増やす



手段

学生が東尋坊に入り、地域と一緒に現状を知り、課題を考えるインターン



結果

3年間で新しい視点・企画・関わる人が蓄積する



坂井市

受け入れ・情報提供・
実証支援



地域・店舗

現場知識・課題共有・
フィードバック



学生

若者目線・時間・
専門性・行動力



完成前の3年間で、人を育てる準備期間にする



提案の考え方

学生インターンを目的にするのではなく、
若い人が関係人口として増えていく仕組みを考えたい。



初年度イメージ

- ・ 学生：4～6名
- ・ 期間：約1か月
- ・ 内容：現地理解・ヒアリング・小規模実践

同じ課題感を持ち、それぞれのスキルで動く。

現地を知り、声を聞き、テーマを見つけ、各自の強みで東尋坊に向き合う。

01

知る

現地を見る



崖、商店街、再整備予定地を歩き、今の東尋坊を理解する。

02

聞く

地域の声を集める



行政、商店、事業者、観光客の声を聞き、課題と可能性を共有する。

03

見つける

テーマを定める



夕方の滞在、既存事業者の利益、情報発信、空き家活用など、取り組むテーマを考える。

04

動く

スキルを活かす



企画、デザイン、SNS、イベント、調査など、それぞれの強みで小さく実践する。

同じ課題感 × 個人のスキル = 3年後につながる実践



企画



デザイン



発信



調査

現地で見てきた、東尋坊の今。

再整備は3年後に向けて進んでいる。だからこそ、今から人とアイデアを育てる余地がある。

視察で見たこと

- 1  東尋坊エリアを歩いて視察
- 2  商店街・崖周辺・駐車場周辺を確認
- 3  坂井市職員・地域関係者にヒアリング
- 4  再整備予定地と今後の活用余地を整理



見えてきたポイント

-  再整備の完成は約3年後
-  現地はまだ大きく変わっていない
-  既存事業者に利益が返る企画が必要
-  完成前から若い人が関われる余地がある



再整備計画

今は計画段階。
準備期間として活かせる。



商店街

魅力ある既存店に
利益が返る形が必要。



夕方の滞在

夕日という魅力に、
まだ伸びしろがある。



若者の関わりしろ

完成前の3年間だからこそ
挑戦できる。

完成を待つのではなく、完成前から人とアイデアを育てる。

写真で見る、東尋坊の現在地。

今の風景と、これから変わる余白の両方を見た。



東尋坊の崖と海

唯一無二の景観が、東尋坊最大の魅力。



既存商店街

来訪者を迎えるが、回遊と滞在の余地がまだある。



再整備予定地・駐車場周辺

3年後に向けて、これから変化していく場所。



夕日が見える海辺

夕方以降の体験価値には、大きな伸びしろがある。



回遊ルートイメージ

一度見て帰る場所から、巡って過ごす場所へ。



現地ヒアリングの様子

地域の声から、企画の方向性を見直した。

現地に行かなければ、見えなかったこと。

机上では分からなかった条件や制約が、企画の方向性を大きく変えた。



再整備は「これから」

完成は約3年後。
今は計画段階だからこそ、
ソフトの準備期間にできる。



足りないのは ソフトの担い手

新しい企画を考え、試し、
回し続ける人がまだ十分ではない。



夕方以降に 伸びしろがある

夕日は大きな魅力だが、
17時以降の滞在導線はまだ弱い。



店舗には費用対効果が必要

地域のためだけでは続かない。
参加する理由として利益も必要。



若者は「呼ぶ」だけでなく「関わる」側になれる

学生の時間・行動力・アイデアは、
地域の新しい力になり得る。



訪問前の想定との ギャップ

Before : 若者の滞在時間をどう伸ばすか

After : 3年後に向けて、若い関係人口をどう増やすか

課題は「今来ないこと」だけではない。完成までの時間をどう使うか。

現地視察を経て、企画はこう変わった。

「滞在時間を伸ばす施策」から、「若い関係人口を育てる仕組み」へ。

BEFORE

3時間パスポート



若者に3時間滞在してもらう仕掛け



店舗を回遊し、夕日まで過ごす導線をつくる



SNS投稿や小さな特典で地域消費を促す



1回の施策としては面白いが、
担い手は残りにくい



AFTER

東尋坊版 学生共創インターン



学生が地域と課題を見つけ、企画し、実践する



再整備完成までの3年間に新しい視点をためる



活動を通じて若い関係人口が育つ



3年後の東尋坊を支える人が残る



「滞在時間」を伸ばす発想から、「若い関係人口」を育てる発想へ。

学生の挑戦が、地域の力になる。

学生の学びで終わらせず、地域にも利益や価値が返る形にする。

学生にとって



学びが実社会につながる
貴重な経験

- ✓ 実践的な学びの場
- ✓ スキルを活かせる
- ✓ 地域との接点ができる

地域・既存事業者にとって



若者の力が
地域の活力につながる

- ✓ 若者目線の企画・発信が入る
- ✓ 新しい来訪者の増加
- ✓ 売上や認知の向上
- ✓ 将来の担い手も増える

行政・東尋坊にとって



持続可能な観光地づくり
の基盤になる

- ✓ 完成前からソフト面の準備
- ✓ 若い関係人口の蓄積
- ✓ 3年後の再整備後に
スムーズにつなげる



学生の学びで終わらせず、**地域にも利益や価値が返る形にする。**

完成までの3年間で、準備と実験の時間にする。

再整備を待つのではなく、その前から小さく始める。

1

2026～2027

| 企画化・協議



坂井市、地域関係者、受入先と
インターンの形を整える

2

2027

| 募集・受入れ準備



学生4～6名を募集し、
テーマ設定を行う

3

2027～2028

| 第1期インターン実施



現地調査→企画→小規模実践
までを実行

4

2028～2029

| 蓄積・3年後へ接続



気づき・企画・若い関係人口を
蓄積し、再整備後へつなぐ



一緒に取り組みたい方

- 坂井市
- 東尋坊商店街・観光関係者
- 受入協力先
- 宿泊・交通関係者



想定体制

- 学生4～6名
- 受入先2～3者
- 地域メンター数名



お願いしたいこと

- 課題提示
- 実践の場の提供
- フィードバック
- 地域との接続

まずは小さく始め、3年後の東尋坊につながる形に育てる。

現実的なリスクを想定し、一つずつ対応していく。

大きく始めず、小さく試し、地域とすり合わせながら育てる。

リスク



学生が集まらない



地域側の負担が大きい



学生の企画が地域の利益につながらない



単発で終わる



再整備計画とズレる



対応策



少人数から始める・大学と連携・テーマを明確にする



1店舗に過度な負担をかけない・受入れを分散する



事前に「地域に返る価値」を条件にする



成果を記録し、次年度へ引き継ぐ仕組みを作る



現地側とすり合わせながら進める



大きく始めない。小さく試し、地域とすり合わせながら育てる。

一度の参加で終わらない。東尋坊に関わり続ける人を増やす。

関わった人が、次の関わる人を生み出す循環をつくる。



学生インターンそのものが目的ではない。若い関係人口が増え続ける入口をつくる。

3年後に場所が変わる。そのとき、人も育っている状態へ。

再整備の完成前から若者が関わることで、東尋坊の未来に土台をつくる。

2026 | 今の東尋坊



まだ大きくは変わっていないが、これからを考える時間がある。

2027 | 学生が入る



現地を知り、地域と出会い、企画に挑戦する。

2028 | 気づきと実践がたまる



小さな企画や新しい視点が蓄積する。

2029 | 関わる若者が残る



OB・OGや協力者として、継続的につながる。

3年後 | 開発後へ接続



場所の完成とともに、人の土台もできている。



地域にもたらす変化

- 滞在時間・消費・再訪のきっかけが増える
- 地域に新しい挑戦の文化が生まれる
- 若者との接点が、未来の担い手につながる



最後に伝えたいこと

学生インターンそのものを目的にするのではなく、その先に若い関係人口が増え、3年後の東尋坊を支える土台をつくりたい。

場所が変わる前から、人を育てる。